

奈文研

ニュース

No.37

Jun.2010

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
<http://www.nabunken.jp/>

第一次大極殿完成記念式典挙行

2010年4月23日、8年の歳月を費やして建設が進められてきた平城宮第一次大極殿復原建物の完成式典が、皇太子殿下をお迎えして厳粛に挙行されました。ちょうど1300年前の和銅3年(710)3月10日のこと、時の天皇、元明女帝は輿を連ねて、藤原京から新都平城京へ遷都します。4月23日は旧暦の3月10日にあたります。

1971年に、第一次大極殿地区の発掘調査が実施されました。周囲よりも高い地形のこの一帯は地質時代の第四紀に形成された固い粘質の地盤が遺構面であり、発掘調査で検出されたのは、整然と配置されたおびただしい数の柱掘方群で、これらはのちに、奈良時代後半に造営された西宮という大規模な宮殿群であることがわかりました。「平城宮跡第72次北」調査も最終段階の「だめおし作業」の行われた7月15日、木曜日の調査日誌に、「東西に縦走する大溝を地山まで掘り進めたところ、溝をほぼ中央で東西に長く分ける段がかすかではあるが残っていた。またこの溝が3ヶ所で北へ方形に張り出しており、張り出し部のつけねにはそれぞれ柱穴が見いだされる。以上から、この張り出しがあるいは階段かそれに類似の施設になる可能性もあり、そうすれば、溝が二つの部分にわかれているのも一つは凝灰岩地覆石抜取穴、一つは雨落溝とも考えられる」と記されています。この断続的に続く溝が第一次大極殿の基壇の形跡であったことは、その後の内部的な研究会である内裏検討会での議論などを重ねた末によりよく所員共通の認識となりますが、調査のさなかの時点では、まだ「大極殿」に関わる遺構とは明記されていなかったのです。

1978年に恭仁宮大極殿の基壇跡の調査が京都府教育委員会の手でおこなわれたことは、平城宮第一次大極殿の復原研究に勢いを与えました。恭仁宮大極

殿は基壇がほぼそのままの規模で遺存しており、いくつかの礎石も、もとの位置に残されていました。基壇地覆石を抜き取った形跡がかるうじて確認された平城宮第一次大極殿でしたが、基壇の規模が恭仁宮のそれと全く一致したことから、『続日本紀』の、天平12年(740)の恭仁遷都に伴い「平城の大極殿^{あわ}并せて歩廊を壊して恭仁宮に遷造」したという記述の正しさが確認され、建物の柱位置、平面規模も判明したのでした。1982年には第一次大極殿地域の発掘調査についての正報告書(平城宮発掘調査報告XI)が刊行され、第一次大極殿建物の詳細な復原研究の成果も公にされました。

こうした研究の成果をもとに、文化庁を中心として建物復原工事が進められたのですが、その過程にあっても、繰り返し問題点の摘出が行われ、テーマごとに奈文研の研究スタッフを中心に内外の専門家を糾合したチームが組織され、より確実性の高い復原案を追究する作業が最後まで続けられたことは、記憶にとどめておきたいと思います。

(副所長 井上 和人)



皇太子殿下におことばをいただいた完成記念式典